修復治療の変遷、そしてこれからの歯科を考える

桑田正博

修復治療とは、患者の精神的、肉体的健康の“要”となる口腔の健康を“形状”として回復することにあると思います。それは口腔の失われた硬組織あるいは軟組織を適切な材料を選択して、生物学的、心理学的、機能的そして審美的形態と状態に創生することにあります。

すなわち、修復治療とは「**そこにあるべき“姿”をそこに創生する**」ことであると思うのです。

百年前、人間の寿命は先進国における統計で４０代と言われていました。

神様は、私達人間に乳歯と永久歯という二つのセットの歯を与えてくれます。

人生 40 年のその時代は、二つ目の歯を永久歯と呼ぶことができました。しかし、80 歳の誕生日を迎えるのが当たり前の現代においては、二つのセットの歯では足りなくなってしまうことが多くあります。したがって、三つ目の歯は、自然に代わり神に代わって、私たち歯科人が担うことになります。

インプラントなど多様な術式の中から患者固有のニーズに適応する修復治療方法を選択できる能力を有していることが肝要です。有能な歯科医師と高度な歯科技工技術を有する歯科技工士によって作られる“三つ目の歯”は、患者がその存在さえも認識せずして違和感なく生活を営むことができるレベルのものとなってきています。日本で**高度な教育を受けている歯科技工士**が、生体親和性の高い材料で作る修復装置は、健全な咀嚼機能、発音機能、審美性、清掃性そして修復物としての強度も保証できて、長期に歯科的健康を維持（ロンジェビティー）することのできる歯科医療レベルにあるからだと思います。

この機会に、**金属焼付ポーセレン開発**についてもお話をさせていただき、1960 年代初め、金属焼付ポーセレン開発当初に行ってきた臨床、1970 年代にはどのような過程を経て発展してきたのか、そして 1980 年代の成熟期に行ってきた修復治療が今日 2000 年代に、口腔内でどのように機能しているのかの臨床を経年的、半世紀にわたって検証してみたいと思います。